

D-2 乳児期の栄養法と知能発達及び体格との関係

宮崎大教育

○秋山露子

目的 乳児期の栄養状態の良否が児童の心身発達とどのような関係があるかどうかを究明する為に検討を進めて来ている。

方法 乳児期の栄養状態が豊かな環境で養育された中学生、小学生、幼稚園児1187名をA群とし、低栄養或はやや低栄養状態の環境で養育された中学生、小学生、幼稚園児1194名をB群として比較検討した。乳児期の栄養法は生後6ヶ月以内の栄養法別に母乳栄養群、混合栄養群、人工栄養群の3群に分け、知能発達はそれぞれの年齢層別に検査された知能偏差値を用いた。身体発達は身長、体重測定に基づいてRohrer指数及びKaup指数を用いた。母集団の分散の均一性についてはF分布を用い、平均の差をT検定した。乳児期の栄養法と知能及び身体発達の関係についてはχ²検定を行った。

結果 栄養状態の好転によって知能発達にも概ね向上がみられ、特に人工栄養群では顕著であった。ISS 60以上の分布はA群では母乳栄養群41.0%に対してB群は24.5%でA群の人工栄養群は40.3%に対してB群は29.6%で概ね向上を示している。ISS 50より40では特に大きな差は見出せなかった。

体格と知能発達との関係は $P < 0.01$ で母乳栄養群のみに有意差が認められた(前報告同様) 中学生、小学生、幼稚園児共に概ね肥満型の者よりも細身の体型の者が知能発達が優れているのは前報告と同様であった。